

【研究ノート】

大災害からの復旧復興においてアートの果たしうる機能

—もう一つの別の時空間、そして鎮魂—

What Kind of Effects Can We Expect for the Art-Project
in the Reconstruction Process from the Great Disaster?

河東 仁

KAWATO Masashi

はじめに

本稿は、全学共通科目「『いのち』の尊厳と福祉」の枠をもちいて、2019年度秋学期に筆者が担当した「東日本大震災から学ぶ『いのち』の尊厳と福祉」(100分×14回)のうち、第12回目⁽¹⁾のレジュメをレポート化したものである。そのため事例を紹介する引用が紙幅の大半となり、論文ではなく研究ノートとして発表する次第である。

他の回では、筆者が2011年5月末より通いつづけている宮城県南三陸町を主たる舞台としているが、本稿では、「フクシマ」において伝統文化と現代的なアートとが邂逅することで紡ぎ出された時空間を通して、大災害時に「アート」の果たしうる機能の一端について考究してみたい。なおここでは、この講義に先駆けて作成した、南三陸町の紹介、とりわけ沿岸部における魚介藻類養殖の工程をイラスト入りで解説したパンフレット「南三陸オデッティア」を紹介するに留めておく。右のQRコードを、スマートフォン等にて読み取っていただければ幸いである。

図1 南三陸オデッティア



そしてまずは、福島における「大風呂敷」プロジェクトの説明から話を始めたい。

1. 非日常性 — 内と外で人と人を繋ぐ、さまざまな思いを包み込む、そして笑う

1. プロジェクトFUKUSHIMA! 宣言

以下は、福島県福島市出身の詩人、和合亮一(1968-)、同県二本松市出身のロックミュージシャン、遠藤ミチロウ(1950-2019)、10代を福島市で過ごしたオールラウンドミュージシャン、大友良英(1959-)を代表として始まった、「プロジェクトFUKUSHIMA!」の開会宣言である⁽²⁾。なお下線と①②は筆者が付した(以下同)。

2011年8月15日、福島で、音楽を中心としたフェスティバルを開催します。

また、これをきっかけに様々なプロジェクトを長期的に展開していきます。

タイトルは「FUKUSHIMA!」。

「ノーモアフクシマ」でも「立ち上がれフクシマ」でもなく、なんの形容詞もつかない「FUKUSHIMA」。現在の、ありのままの福島を見つめることから始めたい。そんな思いで、福島で生まれ育ったゆかりの音楽家や詩人らの有志が集まりました。

地震や津波の被害のみならず、解決の見通しの立たない原子力発電所を抱える現在の福島では、フェスティバルどころではない、という意見もあるかもしれません。

それでも、いやそんな時だからこそ、^①現実とどう向き合うかという視点と方向性を人々に示唆する力を秘めている音楽や詩やアートが必要だと、わたしたちは信じています。

不名誉な地として世界に知られたFUKUSHIMA。しかし、わたしたちは福島をあきらめません。故郷を失ってしまうかもしれない危機の中でも、福島が^②外とつながりを持ち、福島で生きていく希望を持って、福島の未来の姿を考えてみたい。そのためにも、祭りが必要です。

^③人々が集い、語らう場が必要です。

図2 FUKUSHIMA宣言

フェスティバルを通して、いまの福島を、そしてこれからの福島の姿を、全世界へ向けて発信していきます。

FUKUSHIMAをポジティブな言葉に変えていく決意を持って。



2011年5月8日

プロジェクトFUKUSHIMA! 実行委員会

和合亮一／遠藤ミチロウ／大友良英

ここで注目したい語句の1つに、^①「現実とどう向き合うかという視点と方向性を人々に示唆する力を秘めている音楽や詩やアート」がある。多様性を、如何なる時にも、いや非常時だからこそ担保しなければならないことは記すまでもない。もちろん、こうした災害時に「不謹慎だ」、「そのエネルギーを被災者の生活自体に向けろ」といった意見、批判も当然のことながら考慮しなければならない。

2. 想像力と創造力

しかし彼らは、こうした状況において「音楽や詩やアート」の秘める力を確信し、フェスティバルを計画し、実現させた。この確信は、如何なる思いからくるのであろうか。そこで話は飛ぶが、作家M. エンデ (Michael Ende, 1929-1995) へのインタビュー記事を引用する⁽³⁾。

「人間は内面と外面の間の振り子運動の間で生きている」とエンデ氏はいう。

『モモ』の次に書いた『はてしない物語』は、そこに焦点をあてている。同時にこの作品は、1960年代末から70年代にかけて、幻想的な傾向の強いエンデ氏の作品を現実社会の矛盾から目をそらす逃避主義の文学と非難した批評家たちへの回答でもある。

「事実に意味を与えるのは内面なのです。外部世界の問題を解決するには、まず内面の世界に“逃避”しなければならない。社会を変えたいなら、まず新しい社会についての豊かなイメージを持たねばならない。そうして初めて外部の状況を変えて行ける。」

ここでエンデは、「逃避」という自身を批判する人びとの言葉を敢えて用いているが、現実社会の抱える諸課題に対峙し解決策を模索するにあたって、心の内なる世界に全身をひたすことの重要性を説いており、これこそまさに「音楽や詩やアートの秘める力」と通ずるものではなからうか。

すなわち「大災害からの復旧復興においてアートの果たしうる機能」の1つとして、現実社会に対峙するための「想像力・創造力を人びとの内面から発現させる」機能を挙げたい。

さらに、下線部②③のごとく、《^②外とつながりを持ち》、《^③人々が集い、語らう場》を現出させる機能も、アートにはある。このことを大友良英自身の談話⁽⁴⁾から、考えてみたい。

①震災という非常事態の中で

—なぜ、大風呂敷を地面に？

大風呂敷が生まれたのは、2011年に福島で1万数千人を動員したフェスティバル FUKUSHIMA! というフェスでした。もともとは地面のセシウムが来場者の靴や体に付かないように用意したものだったんです。〔中略〕

9歳～18歳までを福島で過ごして、今も実家はそこにある。地元のような感覚があったので動かずにいられなかった。4月11日に福島に行って、愕然としました。津波もさることながら、原発事故が。〔中略〕

②人は笑わないと生きていけない

まず、こういう混乱状態の時に「生きる糧」ってなんだろう？と考えました。

もちろんみんな暗い顔をしているけれど、お酒を飲んでいるとジョークを言い出したりする。その時に「人は笑わないと生きていけないんだな」って気がしました。表面上はジョークも言えない空気で、これをなんとかしなくちゃいけないな、と。^①「今の日本には赤塚不二夫が足りない！」って本気で思いました。今僕らに必要なのは笑いと祭りなんじゃないか。^②それこそが生き抜く力になるんじゃないかって。前者が「あまちゃん」につながっていきます。

—後者がフェスティバル FUKUSHIMA! に？

はい。フェスをこの場所で開催することで、絶望的な事態から「僕たちはどうやって生きていくか？」を示せるなと思ったんです。だから「福島で1万人集める野外フェスをやります」と宣言して動き出した。それがフェスティバル FUKUSHIMA! です。〔中略〕

当初は、放射線量も細かくは公表されていませんでした。〔中略〕専門家の協力のもと詳細に調査したところ、フェスの会場付近の線量は福島市の中心地よりかなり低いことがわかりました。でも、実際に汚染はされている。地面のセシウムが舞い上がったり、体に付着したりし

ないための養生が必要でした。その時に放射線衛生学の木村真三先生から出たアイデアが^③風呂敷を持ち寄って地面に敷くことだったんです。^④SNSで呼びかけて、全国各地から風呂敷をいただきました。それをみんなで1枚1枚縫い合わせて大風呂敷にしました。

^⑤福島の人だけでなく、日本中の人々が風呂敷を送ってくれて、縫いにも来てくれました。内と外をつないでいくことの重要性をこのとき知りました。〔中略〕

昔のような閉鎖的なムラはもう成り立たない。地縁関係に縛られず、くっついたり離れたり、複数掛け持ちできるようなオルタナティブなコミュニティを作っていく方法の1つとして、新しい形の祭りは機能するんじゃないか、そう考えました。

^⑥その中で大事なのが「非合理性」なんです。風呂敷は素材も大きさもバラバラなので、縫うのが困難。雨に濡れたら、運ぶのも敷くのも大変。もっと合理的に作ればいいのに、わざわざ大変なことしてるんです。でもお祭りの神輿に喩えるとよくわかる。神輿ってわざと重くなってるでしょ。運ぶのが大変な方が祭りは盛り上がるんですよ。〔中略〕

③^⑦大風呂敷を敷いた瞬間、日常がハレになった

初めて福島で風呂敷を敷いた瞬間、純粹に「ああ、きれいだな」と思ったんですね。もちろん放射能対策で生まれたものだけけれど、見た目が面白かったりきれいだったりするのは、やっぱり強いです。それで人の心が動きますから。^⑧「この絵を世界中に配信したい」、敷いた瞬間にそう思いました。それを見ると、何も知らない人が「これきれいだけ何？ え、福島？」ってなるでしょう。そうすると人は初めて考えるんですよ。理屈の前に気持ちを動かすのが僕らの仕事なんじゃないかって、そのとき思いました。

以上、かなりの部分を〔中略〕にしたが、それでも極めて長い引用となった。全文を読みたい方は、QRコード図3「大友良英」を介して参照されたい（以下同）。

図3 大友良英



そしてここでまず注目したいのは、^⑤「福島の人だけでなく、日本中の人々が風呂敷を送ってくれて、縫いにも来てくれました。内と外をつないでいくことの重要性をこのとき知りました」、^⑧「この絵を世界中に配信したい」、敷いた瞬間にそう思いましたの部分である。ここには、アートプロジェクトが内の人同士、内と外の人同士を繋ぎ合わせる力をもつことが、実感をもって記されている。

3. 赤塚不二夫が足りない

さらにこれまた批判の対象になりかねない事柄であるが、筆者としては、被災の当事者ではないことを承知しつつ、^①「今の日本には赤塚不二夫が足りない!」、^②「今僕らに必要なのは笑いと祭りなんじゃないか。それこそが生き抜く力になるんじゃないかって」という言葉に賛意を示したい。実際に足繁く通っている宮城県南三陸町においても、「苦しい時にこそ笑いを」というフレーズを2011年度からしばしば耳にする。

そして大友の言葉において最後に注目したいのが、《^⑥その中で大事なのが「非合理さ」なんです》であり、また恐らくはインタビュアーが付したのであろう「^⑦大風呂敷を敷いた瞬間、日常がハレになった」という小見出しである。

ここから想起されることの1つに、ヨーロッパ中世においてなされた「愚者の祭り」がある。
ラ・フォル・ジュルネ
 愚者の祭り (La Folle Journée) とは、1970年代から80年代において人類学を中心に日本で注目された事象であり、さまざまな形態があり起源も諸説ある。だがこの日を非日常的な時空間として、コミュニティの最下位に位置する人をこの日のみ至高の存在とみなして担ぎ上げ、パレードをする。そのあと狂躁的 (free and easy, sometime orgy) な饗宴が繰り返されるといったものである。つまり普段の日常性を支えている規律・秩序・規制などを可能な限り転覆させることが主たる内容になっている。「ガス抜き」をして、コミュニティの平穏性を保つ装置ということにもなる。

しかし当然のことながら FUKUSHIMA! においては、事態はまったく異なる。FUKUSHIMA 全体が非日常的な時空間と化しているからである。実際、2011年度には、原発事故の問題はさておき、目にする全てが非日常化している被災地にてコンビニストアに入ると、たとえ仮設とはいえ、それまでの当たり前になっていた日常的な時空間に包まれ、ホッとしたものである。

それゆえ、《^⑦大風呂敷を敷いた瞬間、日常がハレになった》とは、これまで記してきた全てが逆転した非日常性という意味でのハレではなく、非日常性を背負い込んでしまった普段の生活において、表面化することを「差し控えられ」「慎まれ」ている思い、手振り身振りを受け容れてくれる大風呂敷という「場」の創出と捉えるべきである。

図4 ええじゃないか音頭

以上まで紹介したところで、右のQRコードより、「FUKUSHIMA! 2013 盆踊り」、大友良英作詞作曲「ええじゃないか音頭」の動画^⑤を見て頂きたい。



ところで本稿のサブタイトルに、「もう一つの別の時空間」という造語を付した。これは、alternativeの訳語として筆者がしばしば用いてきたものである^⑥。ここでもう一つ「の」という語を付したことに説明をくわえたい。その1つは、まさに大友が語るころの《^⑥非合理さ》を考え、入れる必然性のない語を敢えて組み込んだのである。

第二の理由は、alternativeなる語句は「代替的」というニュアンスも有しているため、日本語の文脈においても、「主たるものの」一時的な代行といった意味合いをもつことが多い。アートが創り出す場は、もちろん主たる生活空間に代わり得るものには成り得ない。しかしこの語がもつ積極的な特性を強調するため、「もう一つの」という語句を添えた次第である。言い換えると、エンデが指摘しているように、《人間は内面と外面の間の振り子運動の間で生きている》のであり、その内面的な世界は単なる代替物ではなく、外面の世界すなわち現実界を見据えるための新たな視点を産み出す想像力、創造力の源泉であるという積極的な意味を込めたからである。

最後に、1970年代から80年代に興隆をみせたラジオの深夜放送は、当時の若者の一部とはいえ、彼ら彼女らにとって日常の時空間とは異なる「解放区」といった性格を帯びていた。そして

その頃の手書きの投書を編集した書物の1つに『もう一つの別の広場』なるタイトルが付けられたことも理由として挙げておく。

とこのようにアートを中心に据えたフェスティバルは、1) 内側の人間同士、内側と外側の人間同士を繋ぐ機能、2) 想像力・創造力の発現する場として現実社会の課題を解決する新たな方策を産み出す機能、3) ことに大災害時には普段は抑えられている様々な思いを発出する場、4) また「笑い」を引き出す機能をもつこと、これらを以上より指摘したい。

II. アートプロジェクトとは

1. 熊倉純子「アートプロジェクト事始め」

さて大風呂敷を1例として紹介したところで、そもそもアートプロジェクトとは如何なるものなのかという、議論の原点に立ち戻ってみたい。ここで引用するのは熊倉純子東京藝術大学音楽環境創造科教授（1958-）の説明である。アートマネジメントの専門家を育成することに尽力している方で、FUKUSHIMA!のように、アーティストの側から内発的・自発的に現出されてくるプロジェクトとは、多少、ニュアンスが異なっている。しかし日本におけるアートプロジェクト活動の第一人者であり、筆者自身も2011年度に東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）主催による彼女の公開講座を受講し、得るものが多かった。その彼女は、どのように捉えているであろうか⁽⁷⁾。

定義なんて堅苦しいことは本に任せておいて、要するにアートプロジェクトは、みんなでわいわいがやがやとつくるもの、これが最大のツボです。美術館やギャラリー、音楽ホール、劇場など、専門の文化施設ではなく、野外や生活空間のなかに表現が出現することが多いのが、アートプロジェクトの第一の特徴です。〔中略〕

美術作品がまちなかに展示されているだけのシンプルな形態のアートプロジェクトも多いですが、観客としては、〔中略〕みんなでつくっているんだなあ、と感じると旅の情緒が増すのが、アートプロジェクトの楽しみ方のツボでしょうか。まちづくりへの期待から行政が提唱することも増えていて、官民あげてみんなで盛り上げよう、という機運が高いプロジェクトも増えています。

なお2011年度の公開講座を受講した際のテキストが、PDF版にて、公開されている。日本各地におけるアートプロジェクトの実例が豊富に掲載されており、極めて貴重なテキストである。是非とも、次のQRコードより、読み取っていただきたい⁽⁸⁾。

図5 熊倉純子



図6 テキスト



2. 「子ども大学ふじみ：みんなでアーティスト」

筆者は、2014年8月1日⁽⁹⁾および15年8月3日⁽¹⁰⁾に、埼玉県富士見市が近隣大学と連携しながら開催している「子ども大学ふじみ」プログラムの一環として、小学生高学年50名を対象とするアートプロジェクト「みんなでアーティスト」を実施した。

メインテーマは、2014年度は「みんなで大きな絵を描こう」(10m×1.1mのロールペーパーを使用)、2015年度は「みんなで大きな折り紙を造ろう」(5m×5m)であり、いずれもさまざまな小学校から集まった生徒たち同士が、そして河東ゼミの学生たちと一緒に作品をつくるなかで、想像力、創造力を自由に発揮することの楽しさを体験するよう 図7 2014年度 図8 2015年度 企画・実行したものである。その時の記録は、次のQRコード



にて読み取れるので、ご覧いただければ幸いです。

以上で、アートプロジェクトに関する基礎的な紹介は終了した。しかし本稿のタイトルには、「大災害からの復旧復興において」という語句を冠しており、アートプロジェクトの果たしうる機能として、今一つ重要なポイントを付け加えておきたい。それは「鎮魂」である。もちろんこれは、能や神楽などはもちろん、東北地方で言えばしし鹿子踊りといった伝統芸能においても重要なポイントの1つになっている。ただし後者に関しては注1で示したごとく、第九回目で扱っており、ここではアートプロジェクトと鎮魂の問題に焦点を絞りたい。

III. アートによる鎮魂プロジェクト

1. 3.11 祈りの日①——祈りの手紙の朗読

福島県福島市山口に、香澤山安洞院あんどういんという曹洞宗の古刹がある。東日本大震災の被害を受けた各地にある寺院と同様、毎年3月11日に慰霊法要が営まれる。そしてこの寺院は周知のごとく2016年より、プロジェクトFUKUSHIMA!の発起人の1人である詩人の和合亮一まつが主宰する「未来の祀りふくしま」と共催して、「祈りの日」というプロジェクトを展開している。その具体的な内容は以下の通りである⁽¹¹⁾。ちなみに和合はこの寺院の檀徒の1人という縁が、結びつきのきっかけである。

図9 主旨説明



2016年より行われている、3月11日夜の鎮魂と供養の芸能の奉納。仏前に捧げる祈りと願いを美しい調べに乗せて、彼の地へと届けるためのものです。古来より人々は死者を弔い、超自然的な現象への畏敬の念をあらわすために、様々な形で祈りを捧げてきました。

本年で5回目となりますが、詩人・和合亮一さんが発起人となって立ち上げられた「未来の祀りふくしま」との共催となり、震災後の心の復興を目的とした公演となります。

具体的な内容は、以下のとおりである。

第一部：全国からその年に送られてきた「祈りの手紙」を、俳優の紺野美沙子が朗読する。

第二部：朗読と芸能の奉納——鎮魂の詩を和合亮一が朗読し、尺八奏者の中村明一と共演する。

舞踏家の沼崎なな香が舞いを奉納する。

さらにこれらのプログラムの前に、14時46分より慰霊塔の前にて、慰霊法要がなされる。ちなみにこの慰霊塔は全6基あり、2017年に建立された。その目的を住職の横山俊顕はこう記す⁽¹²⁾。

図10 仏塔の主旨



2043年に完成するプロジェクトです。

2017年3月11日。震災七回忌を迎えるにあたり、慰霊塔の傍らに6本の仏塔（鎮魂の詩碑）が建立されました。日本を代表する郷土の詩人・和合亮一氏（安洞院檀徒）の鎮魂の詩を刻み、末代まで震災を語り継ぐための試みです。

残り5本の仏塔は、静かに、詩が刻まれる日がやってくるのを待っています。仏事の回忌ごとに仏塔に詩が刻まれ、震災三十三回忌をもって慰霊塔の両側に計6本の仏塔（詩碑）が並ぶ予定です。2本目の仏塔に詩が刻まれるのは、2023年に迎える十三回忌法要となります。〔中略〕

夕刻から本堂で行われる鎮魂の催しについては、2017年より「未来の祀りふくしま」の主催となり、震災からの心の復興を目指す福島県の補助事業として再スタートいたしました。スタッフの皆様の想いが一つになり、生者と死者をつなぐ架け橋になることを切に祈ります。

2. 3.11 祈りの日②——虚無僧行列

この法要に先立ち、14時より虚無僧行列が、山門⇒本堂⇒慰霊塔広場へと鎮魂の調べを響き渡らせる。これはもともと明治時代に虚無僧尺八中興の祖として全国に名を馳せた神保政之助（1841-1914）の菩提寺が安洞院であることから、彼の命日である1月21日に、尺八演奏家として世界中に名を知られる中村明一の呼びかけにより始まったものである。そして全国の尺八の愛好家に参加を募るといった形式をとっている。すなわち伝統芸能ではなく、まさにアートプロジェクトである。そのため多くの人びとが加わるよう、服装の規定は黒の着流しであること、そして天蓋を被ることのみとなっている。

そして「祈りの日」とも結びつけられ、3月11日の法要の前に、中村を先達として全国からあつまった総勢10名ほどの虚無僧姿の尺八奏者たちが、鎮魂の調べを奏でながら練り歩くという形式が生まれたのである⁽¹³⁾。



おわりに

確かに安洞院における祈りの日プログラムは、宗教色も濃く、いわゆるアートプロジェクトとは色彩を異にする面も多い。しかし大災害からの復旧復興とアートプロジェクトの関係を考える

さい、「鎮魂」の要素が重大な意味をもつことを、最後に強調しておきたい。またそれだけに、犠牲になった方々を悼む手紙を全国、全世界から募り、朗読するプログラムは、宗教色のあまり感じられないアートプロジェクトとして、今後の発展に注目してゆきたい。いわば、死者と生者とを繋ぐ、新しいアートプロジェクトの模索である。

注

- (1) 1.「講義の目的と概要」、2.「阪神淡路大震災」、3.「東日本大震災」、4.「避難所」、5.「復旧復興の過程①：宮城県南三陸町の被災状況」、6.「復旧復興の過程②：公助&共助による内発的-自発的復興」、7.「復旧復興の過程③：内発的-自発的復興②」、8.「復旧復興の過程④：関係人口の創出」、9.「復旧復興の過程⑤：伝統芸能のもつ力」、10.「被災地から社会的課題解決の先進地へ：FEC自給圏」、11.「次の大災害へ備えて：多様性の視点から多角的に考える」、12.「大災害とアート：もう一つの別の時空間、そして鎮魂」。13.「原子力エネルギーと再生可能エネルギー」、14.「総括」

- (2) <http://www.pj-fukushima.jp/about/2011.php> より転載。

- (3) 「『モモ』の原作者、ミヒヤエル・エンデ氏に聞く」『朝日新聞』1988年7月15日付け夕刊。

- (4) 「震災で生まれた『大風呂敷』がこれからの日本にもたらすもの——大友良英さんに聞く」『The Huffington Post』2015年10月15日。

https://www.huffingtonpost.jp/2015/09/29/artscouncil_n_8217958.html。

- (5) <https://www.youtube.com/watch?v=BtHqw5xzbaI>。

- (6) 筆者は宗教学を専攻しているが、その最大の理由もまた、このalternativeなものを探究するためである。そして現在、大きく3つのテーマを追いかけている。

その1つは夢という「もう一つの別の時空間」と日本人がどのように対峙してきたかを論究することで、日本列島に住む人びとの「こころ」の歴史の一端を浮かび上がらせる研究である。そして本稿とほぼ同時並行で、三島由紀夫『豊饒の海』四部作に対して夢という従来なされなかった視点から考究する拙論を、同じく本学部を退職するにあたっての卒業論文として執筆している。

いま1つのテーマは、アートがコミュニティの形成や存続とどのように関わりうるのかであり、本稿はここに位置する。

最後が宮城県南三陸町における野外活動および研究である。そしてこれは復興支援というよりは、食料 (food)、エネルギー (energy)、介護 (care) の地産地消、すなわち「FEC自給圏」(内橋克人) が内発的自発的に現出する可能性を教わり探究したいがためのものである。

- (7) https://www.nettam.jp/course/art-projects/1/?utm_source=Internal&utm_medium=website&utm_campaign=author。

- (8) https://tarl.jp/library/output/2015/art_projects_history_japan_1990_2012_hoi/。

- (9) 坂無淳、沖直子、河東仁、空閑厚樹(2015)「大学教育におけるファシリテーション：立教大学コミュニティ福祉学部の実践例から」『立教大学コミュニティ福祉学部紀要第17号』、pp.21-41。

https://rikkyo.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=10862&item_no=1&page_id=13&block_id=49。

- (10) 佐藤壮広、河東仁、坂無淳 (2016)「大学教育におけるファシリテーション (3) : アウトプット (作品化) の事例を中心に」同紀要 19号、pp.75-91。

https://rikkyo.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=12014&item_no=1&page_id=13&block_id=49。

- (11) <http://31linori.net/pray.html>。

- (12) <http://31linori.net/>。

- (13) 写真は、<http://31linori.net/award/topics.html#200110> より転載した。